

2016年度教師海外研修(パラグアイ) 研修報告書

学 校 名	弥富市立弥富北中学校	氏 名	児玉やこ
-------	------------	-----	------

<印象に残る写真2点>

●写真1 [3344]

「ンベジュ」をひっくり返すママ

「ンベジュ」はパラグアイの冬の料理。マンディオカ（キャッサバ）とチーズと卵を混ぜ成型しながら焼きます。ママは料理上手で、ひっくり返すのもお手の物。おいしいパラグアイ料理をたくさん作ってくれました。



●写真2 [6207]

うまくできたよ！

職業訓練校、建築科の生徒たち。慣れない折り紙にも関わらず、慎重に丁寧に折り進めて、すてきな折り紙の箱ができました。交流を一緒に楽しんでくれる素直ですてきな生徒たちでした。



1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

（特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて）

2年前から国際理解教育に取り組んでおり、今年度1年を担当するにあたり、国際理解教育の3年間のモデルプログラムを創ろうと考えている。そのためには、私自身がまず世界のことを知らなければならない。自分の目を見て、聞いて、感じたことを生徒に伝え、世界と生徒をつなぎたいという想いをもって参加した。日本から見ると、地球の裏側にあるパラグアイに日系社会が存在することや、日本人が多く活躍していることを知ることができた。ホームステイや現地の子どもたちとの触れ合いの中では、人の温かさや穏やかな時の流れを体感した。一方で、バリアフリーではない街、格差の存在、ごみ捨て場の横のスラム街で生活する人々の様子を垣間見て、課題を共に解決するために考えなければならないことを知った。青年海外協力隊やシニア海外ボランティアの方へのインタビューを通して、自分たちが創る世界に夢をもつことの大切さや、地球市民として考え行動することの意義について生徒に伝え、頭に世界地図を描き世界を身近に感じられる生徒の育成を目指したい。「見える世界が変わる」と聞いて参加したこの研修で、新しい知識や価値観を得ることができた。SDGsのために自分ができることを生徒と共に考えていきたい。

2. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

（1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

人とのつながりや自然とのつながりを大切にしたパラグアイの生活が、とても魅力的に感じた。家族を1番大切に思っているのはもちろん、友達や近所の人と助け合い、一緒にテレレを飲みながらゆったりと過ごす生活が当たり前になっている。また、どこに訪問しても笑顔で迎えられ、日本人とわかると知っている日本語で話しかけてくれるなど歓迎された。食事では「命をいただいている」ことを実感した。食事は庭で育てた野菜や果物を調理して作る。味付けのレモンや香辛料も、朝、庭から採ってきたものだ。家畜は大切な食糧で、肉は庭の炉で炭火焼きにする。自給自足の生活からは、命の大切さや自然と共生することの大切さについて考えさせられた。ラパーチョと呼ばれる美しい花が咲き、木に溢れた穏やかな街並が印象に残っている。電力は水力発電がほとんどで、植林をして環境を守りながらエネルギーを利用している。どの訪問地においても、女性の活躍が目立っていた。エネルギーにおいてもジェンダーの視点においても、日本が見習うべき社会があると感じた。さらに、ゆっくりとした時間の流れを体感し、幸せとは何かを考えさせられた。

（2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

パラグアイ人は日本人と似ていると感じた。訪問先の生徒・児童は、笑顔で私たちを迎え、交流やインタビューには照れながらも素直に応えてくれた。将来の夢や大切なものを聞くと、周りの様子をうかがいながら書き進めたり、質問の意図を確認したりするなど、物事に真面目に慎重に向き合う姿が見られた。休み時間には、友達と遊んだり話したりして一緒に過ごす時間を大切に、授業では教え合ったり、共感し合ったりして協調性が感じられた。日系社会が存在するためか、日本食が生活に浸透している。ホームステイ先のパラグアイ人のお母さんは豆腐に醤油をかけて食べ、街中では日本語のレストランの看板も目にした。日本の企業の自動車も多く出回っている。訪問した技術訓練校では、シニア海外ボランティアの方による日本の技術の伝達に合わせて、機器や道具も日本から持ち込まれたものであるとうかがった。青年海外協力隊やシニア海外ボランティアの方の活動から、JICAの活動が日本とパラグアイをつないで、よりよい世界の創造に一役買っていることがわかった。パラグアイで栽培されたごまの多くは日本に輸入され、日本の市場に出回っている。パラグアイで貧困撲滅を目指してごまの栽培を広めた白沢氏の思いも、日本とパラグアイをつないでいる。

（3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

パラグアイの人は、家族・地域・自然…様々なものと共生している。障がいをもつ人がいても、誰かがサポートして生活が成り立つ社会であると感じた。しかし、ハード面が整っていないため、一人で出歩き、自分の力で生きていくのは難しい。一方、日本は施設のバリアフリー化が進み、教育も充実している。しかし、皆で支え合う共生の意識はパラグアイを見習わなければならないと感じた。最終日、車窓から見たスラム街は、ごみにあふれ、水はけの悪い道は水たまりがそこら中にある不衛生な街だった。日本にも、貧困問題がある。貧困撲滅は世界共通課題であり、SDGsにあるように誰一人取り残してはいけない。そのためには、日本でもパラグアイでも、世界を視野に入れた教育や取組が必要になる。幸せの形は、国によって人によってそれぞれだが、地球人全ての幸せを守るために私たちができることを子どもたちと考えていく必要がある。そのために必要なのは「夢」と「絆」であると学んだ。青年海外協力隊の方は、世界を変える力があると信じて、大きな「夢」をもって活動されている。その「夢」は、一人では叶えられない。たくさんの人との「絆」が不可欠だ。「夢」と「絆」を手に、世界に羽ばたく生徒を育てたい。

3. JICAの国際協力事業の「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

訪問を通して、イグアス流域の管理や衛生管理・維持の必要性など、その国や地域には存在しなかった価値

観を広めることは難しいが大切な活動であると感じた。また、日本の工業技術や教育技術、スポーツ指導などを伝える事業は、ライフラインが整いつつあるパラグアイにとって、今必要な事業である。パラグアイの先生方が、JICA の事業で日本へ来て学んだと話していた。青年海外協力隊やシニア海外ボランティアのような派遣事業も有効であるが、日本に来て日本の良いところをもち帰ってもらえるような受け入れ事業も大切であると感じた。

青年海外協力隊の方に話をうかがう中で、一人で苦戦された話が印象的だった。職業訓練校やスポーツの青年海外協力隊の方は複数の隊員が派遣されていて、意見交流ができ心強そうだった。複数配置が可能になると、一人では変えづらいことも挑戦しやすくなり、可能性も広がるだろうと感じた。特に、保健師・教師は苦勞が多そうであった。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

③ 青年海外協力隊（柔道／バドミントン／レスリング／ウェイトリフティング）活動／スポーツ庁訓練センター【田原／児玉】

スポーツ訓練センターの施設は、大変立派であった。陸上トラック、体育館、テニスコート、フットサルコートなど様々なスポーツのための場が整っている。利用しているのは、健康維持のためにランニングしたり、フットサルをしたりとスポーツに親しむ人から、世界大会出場を目指す人まで、いろいろな人だった。青年海外協力隊の松本さんは、柔道を教える活動をされている。決まった時間に集まらない Hora パラグアジャの生徒やドイツ人のコーチと良い関係を築きながら活動を進められていた。夢は「パラグアイ代表の柔道選手を東京オリンピックに派遣すること」だそうだ。計画的な生徒の募集や練習時間の確保が課題であると感じた。他にも、ウェイトリフティングやバドミントン、レスリングの青年海外協力隊の方が活躍されていた。自分の得意なこと、努力を重ねてきた分野をいかして活動される姿は輝いていた。スポーツは、言葉がわからなくても国を越えて人をつなぐものである。オリンピックが平和の祭典と呼ばれるように、今後もスポーツを通して、国と国との平和の架け橋となる活動が続くよう願っている。（児玉やこ）

⑧ モンダウの滝【児玉／油浅】

観光地化が進んでいないパラグアイに来て、初めて観光地らしい場所を訪れた。それが、モンダウの滝である。パラグアイ東部の中心都市、首都アスンシオンに次ぐ都市であるシウダ・デル・エステ市から約3キロの場所にある。入場券を買って中に入ると、森林浴ができそうな散歩道が伸びていた。木々が植えられ、置物が置かれた庭を通りすぎると、モンダウの滝を望む展望台へと続く階段がある。そこには、銃をもった警備員が厳しい顔で立っていて、物々しい雰囲気が漂っていた。パラグアイでは、銃犯罪も起こると聞いている。研修中も様々な場所で、銃を持った警察や警備員に出会った。温かい穏やかなパラグアイ人としか会っていない私は、警戒態勢を目の当たりにし、そのような危険もあることを思い出した。階段を下りると眼下に広がるのは、迫力満点のモンダウの滝。落差40メートルで何段にも分かれて落ちる水量は膨大である。滝は透明度が高くきれいで、水しぶきが展望台にいる私たちにも届いた。太陽の光が美しく反射し、大きな虹もかかっていた。さらに滝の勢いを感じたくて、エレベータに乗って滝つぼに行こうとすると、そこは別料金。観光地化が進んでも、自然を大切に共生する意識が残っていくことを願う。（児玉やこ）

⑨ パラグアイ人宅でのホームステイ【全員】

ホームステイでは、「人とのつながり」と「自然とのつながり」について印象に残った。ママは、私たちが困らないように、言葉が通じない中で試行錯誤しながらコミュニケーションを取ってくれた。初めて会った人も、家族も、近所の人、目の前にいる人全てを大切にすることが当たり前になっている。隣に住む娘家族も

合流し家族そろって食事したり、ママの友達が家族の一員となって食事をしたりすることもあった。また、近所同士の行き来も頻繁で、地域で助け合い、近所に住んでいる子どもは町の皆で面倒を見ていた。年上の子は年下の子の面倒を見て、本当の兄弟のように一緒に遊び育つ様子を見て、「人のつながり」が強く温かい家族や地域の人間関係を日本も見習いたい。「自然とのつながり」は、食事のたびに感じた。家には冷蔵庫2台、大きな冷凍庫が1台あり、さまざまな肉（牛・鹿・やぎ・鶏・羊など）が保管してある。冷凍庫にある肉はほとんどが庭で飼って育てた命である。また、畑でとれたハーブ、唐辛子、ねぎ、レモンなどを料理に使ったり、庭のマングローブやバナナなどの果物を食べたりする。主食のマンディオカも、庭の畑で育てていた。「自然の命をいただく」生活は大変貴重な経験となった。（児玉やこ）

⑬ ニャンドゥティ工房【村田／児玉】

ホテルからバスや車が多く通る大通りを歩いて5分、近代的な建物にニャンドゥティ工房があった。ビデオと実演を見せてもらえる施設で、様々なニャンドゥティが販売されていた。ニャンドゥティは、スペインのレース編みとグアラニーの機織り文化が融合された伝統工芸である。グアラニー語とスペイン語が公用語であるパラグアイの歴史を物語るニャンドゥティだが、後継者不足という課題がある。これは日本でも同じ課題があり、資本主義社会の中でも伝統を守るための価値観を身に付け、制度を整える必要がある。ニャンドゥティは、蜘蛛の巣という意味で、木枠に張った布に機織りと同じ要領で刺しゅうをすることで作られる。細い糸は難易度が高く、高価だそう。先住民の色彩を思わせるカラフルな品が多いが、単色やグラデーションの品もあり、一つ一つ違った手作りならではの味がある。工房のすぐ近くには、ニャンドゥティのお店があった。ニャンドゥティのコースターやテーブルクロス、ピアスや人形などもあり、観光地化されていないパラグアイで初めてお土産を買った。パラグアイには他に、アオポイという刺しゅうを用いた伝統工芸もある。今後パラグアイがさらなる発展を遂げても、魅力的な伝統を受け継いでいってほしい。（児玉やこ）

⑬-1 アスンシオン市内見学・教材収集【児玉／村田】

パラグアイの首都、アスンシオンは街中にピンクや白、黄色の花を咲かせるラパーチョをはじめ、木が多く植えられている。その木々と建物の間から見える空は青く、心地いい風が吹いていた。教材収集のために訪れたコロン通りは、民芸品のお店や露店が並ぶ。先住民の方は、マラカスや笛などの楽器類、カラフルなブレスレットやカバンなどの民芸品を販売していた。また、テレレを飲むための水筒（テルモ）やコップ（グアンパ）、ストロー（ボンビージャ）が並ぶ露店も見かけた。銀細工やグアラニー民族衣装、革製品なども多く売られている。お店の人は質問をすると商品の説明を丁寧にしてくれた。基本的には商品を勧めてくることもなく、自由に商品を見る私たちを笑顔で見守ってくれた。優しい店主のおかげでとても快適に買い物をする事ができた。途中で立ち寄った大統領府は大変立派で美しい建物で、厳重な警備がされていた。外観に見とれていたが、直前に車窓から見たスラム街が頭に浮かび、貧困や格差の問題が根強く残っていることを実感した。街中は、交通量も人の往来も多かった。日本でおなじみのファストフード店や、パラグアイの料理のエンパナーダやチパのファストフード店が並んでいた。（児玉やこ）

● パラグアイでの食事全般【笹ヶ瀬／児玉】※

パラグアイの食事を通して、一番に感じたことは「私たちは命をいただいている」ということである。ホームステイでいただいたアサード（牛肉の炭火焼き）やミラネーサ（牛肉を揚げたもの）、パハグアマスカダ（牛肉とマンディオカをハンバーグのようにして焼いたもの）は、庭で飼っていた牛の肉で作られている。チパ（マンディオカ粉とチーズのパン）やマンディオシュルル（マンディオカを細かく刻んでパラグアイチーズと卵を混ぜて焼いたもの）は、庭で育てたマンディオカが使われている。スープに入れる唐辛子やサラダにかけるレモンは、その日の朝に庭で摘む。ほとんど自給自足の生活である。日本では、スーパーに並んでいる加工され

た物を口にすることが多いが、パラグアイで目の前の命が自分の命を支えていることを実感した。飲み物は、冷たいマテ茶のテレレ、炒った葉を使い砂糖やミルクを入れて飲むコシードがあった。テレレは回しのみが習慣となっており、人と人をつなぐお茶でパラグアイの生活には欠かせないものである。また、日本食が食べられるレストランが多くあり、醤油や豆腐が簡単に手に入る。食生活から、自然と共生するパラグアイの生活や日系社会の存在がうかがえた。(児玉やこ)

5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ・パラグアイは気温差が激しく、ダウンを着る日もあれば半袖の日もあった。脱ぎ着できる服装が便利。
- ・学校紹介の写真はA5サイズで印刷・ラミネートし、マナビノオトにはさんで持ち歩いた。小さなカバンにも入り、便利。
- ・食事は揚げ物と肉料理が多いので、少し胃が疲れるかもしれないが、どれもおいしくいただいた。宿泊先にもよると思うが、日本食も豊富にある。梅干しは持って行かなくてもOK。
- ・テレレは氷の入った水を使用しているので、お腹が弱い人は少なめがよいと思う。(遠慮せず、ノーグラシアス)
- ・道路近くは砂埃が上がる。特に、赤土の道路では、前が見えないほど。私は気管支が弱いので、そういう場所ではマスク必須だった。
- ・現地の子どもたちに夢や大切なものをピクチャーアンケートした。日本の子どもたちにも事前にピクチャーアンケートして写真を印刷して持っていった。書き方の見本にもなるし、日本の子どもたちの考えに興味をもってもらえた。
- ・現地の訪問時の状況がよくわからなかったが、授業プランの大筋を心づもりしておく、現地でも「ここは逃さないようにしよう」「このエピソードがねらいにつながるな」と考えながら学べた。

6. その他全般を通じての感想・意見など

毎日の夜の振り返りは、仲間の意見を聞いて視野を広げる貴重な時間となった。同じ場所を見ているのに、感じ方やとらえ方が様々で刺激を受けた。また、仲間の意見を聞く度に、この人すてきだなと感じることができた。訪問がおしたり、疲れていたりして、ゆっくり話せないことがあったのが少し残念だった。多くのことをたくさんの訪問地で学びたいと気持ちと、振り返りの時間も十分にほしいと思う気持ちと…難しいですね。

一緒にパラグアイに行った9人の仲間も、通訳さんもドライバーさんも、皆がすてきな人で、研修の学びが深まった。感謝しかありません。今後もつながっていたいと思う。

最終日に何とか時間を作ってもらい、スラム街を車窓から見せてもらった。パラグアイは開発途上国の中でも、先進国に近づきつつある国である。しかし、格差社会や教育の質など課題がある。話で聞くのと実際に目の当たりにするのは、子どもたちに伝える際に違う表現になると思う。安全面など簡単ではないと思うが、貧困地区を訪問できるとありがたいと思う。

心に残る貴重な経験となりました。子どもたちに還元していこうと思います。本当にありがとうございました。